ガラスのはなし

井上曉子＝著

技報堂出版

はしがき

ガラスという言葉でおもい浮かべるものは人によってさまざまです。シンデレラのガラスの靴、おはじき、割れた窓ガラス、ワイングラス、コーラのびん、高層ビル……。改めて見回すと、子供の時から接するすべての情況に、まるで当然のように入り込んできているガラスに気がつきます。

しかし近年、こういった身近なもの以外にも、普段あまり私達の目にふれないところでガラスはますます使われるようになりました。光ファイバーや人工骨など、これからの先端技術をささえていくガラスにはもはやこれまでの、透明で美しい、壊れやすく危険、といったイメージはなく、これらが同じ素材から出来ているとはとてもおもえないほどです。

永いあいだガラスが人々に愛されてきた理由は、素材としての美しさ、便利さにほかなりませんが、その最大の魅力は何かときかれれば、このような、ガラスのもつ変幻自在なかわり身の面白さかもしれません。原料、熔解、加工のあらゆる条件のちがいによって、あるときはダイアモンドのように人を魅惑し、あるときはミクロの糸となって情報を伝達する、このガラスの不思議な才能は、ガラス工芸の分野で古代から各地でじつに多種多様な作品をうみだしてきました。少しでも美しく便利なものをつくろうとする貪欲なまでの人間、それにこたえて思いがけないほどの脱皮をくりか

えしてきたガラス、その変身の見事さこそ人間をとりこにしてきた魔力といってよいでしょう。

またガラスはそれを受け取める側の姿勢をとおして、文化や社会のようすまで写しだしてしまいます。そのあらゆる軌跡を追うことで、人間のさまざまないとなみの断片をのぞくことができるのです。一個のカットグラス、一枚の板ガラスの背景を知ろうとすれば、永い歴史と膨大な空間に足をふみいれることになり、さらにその奥深さを思い知る結果となります。

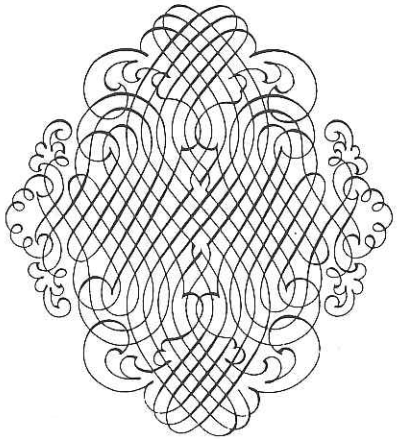
この本は、こうしたガラスのさまざまな側面を、私自身が興味をもったテーマをもとにつづってみたものです。ガラス工芸史の一角という狭い範囲のなかでさえ、つみかさなる疑問と問題の無限さに茫然とするおもいです。いたらぬところや間違いが多々あるとおもいますが、ぜひ皆様のご教示をお願いいたします。

最後になりましたが、資料を利用させていただいた方々、その他さまざまな問題で貴重な御助言や御協力をいただいたたいへん多くの方々に深く感謝するとともに、この本を書くきっかけを与えて下さいました清水正秀氏、技報堂出版の横山猛氏にも、ここで厚く御礼をもうしあげる次第です。

一九八八年十月

井上暁子

ガラスのはなし



・・・・・・・目次

1 ビイドロ細工の阿蘭陀船▩見世物とガラス▩ 一
2 ふたつの白璃瑠碗 八
3 平安文学とガラス 一五
4 文明開化とランプ 二二
5 江戸・明治のビイドロ師 二九
6 ビイドロの簪と娘たち 三五
7 薩摩切子をめぐって 四二
8 「硝子戸の中」から 四八
9 ガラスの加飾法▩カッティング・エングレイヴィング▩ 五五
10 釉・ガラス・七宝 六三
11 モザイク・グラスの宇宙 六九
12 ポートランド・ヴァーズ 七六
13 ステインドグラスの伝統技法 八二
14 ステインドグラスの受難 八七
15 アルタールの職人 九四
16 鏡・ヴェネツィアとフランス 一〇一
17 オランダの静物画とガラス 一〇九
18 オランダの女性エングレイヴァー 一一五
19 ジャコバイトのバラ(1) 一二二
20 ジャコバイトのバラ(2) 一二九
21 ガラスの植物園 一三五
22 パート・ド・ヴェール 一四一
23 アール・ヌーヴォーとガラス工芸 一四八
24 ガラス繊維の歴史 一五五
25 クリスタル・パレス（水晶宮） 一六二
26 ガラスと宝石 一六八
27 クリスタルグラスの響き 一七五
28 お酒とボトルの話(1) 一八三
29 お酒とボトルの話(2) 一九〇
30 香水びんの歴史 一九六

I ――ビイドロ細工の阿蘭陀船■見世物とガラス■

江戸時代の見世物

現代の人々にとって手近な娯楽といえばまずテレビでしょうが、かつてそのようなものがなかった時代、芝居見物とともに民衆の人気を集めていたのは、神社仏閣の境内や各地の盛り場で催されていたさまざまな見世物でした。

江戸時代の盛り場は京都では四条河原、大阪は難波新地、そして江戸ではなんといっても両国橋界隈と浅草奥山、上野山下でした。これらの盛り場では小屋掛けの小芝居や見世物が常設で毎日のように興行され、その内容も常に新しいもの、珍しいものをとかけ変えられていました。そのうえ、各地の寺社でも開帳、祭礼、縁日と、おりにつけては臨時の見世物がありましたから、江戸っ子も飽きるひまはなかったようです。

この分野の貴重な研究書である朝倉亀三の『見世物研究』によると、見世物は軽業や力持ちなどの技芸を披露するもの、不具者や舶来の珍獣を見世物にするもの、そしてからくり装置や籠細工、菊細工などの細工物に分けることができました。なかでも細工物は安永年間（一七七二―八〇）の頃

から次第にさかんにおこなわれるようになり、寛政年間（一七八九―一八〇〇）には大作りとよばれる、とにかく大きさで驚かせようという巨大なつくりものが流行しはじめます。また、ただ大きくするばかりでなく、おもいがけない材料を使う「取り合わせの妙」も観衆を楽しませる細工人の腕の見せどころでした。たとえば「飛んだ霊宝」という出し物は寺の開帳の際に陳列する寺宝を乾物でつくってみせたもので、そのなかの不動明王は

頭は栄螺、顔は鮭の頭、手足は干蛸、体は鮭の塩引、衣は干蛸、袈裟は昆布と馬鹿貝の目刺、剣は刺身包丁、縛の縄は吊し縄、火炎は鎌倉海老、台座は栄螺と鮑

といった「とんだ」取り合わせで大評判をとったのです。このように他愛もない見世物もあたれば大儲け、へたな模倣や手抜きのものでは目のこえた人々にすぐにソッポをむかれてしまいますから、興行師や細工人は必死に知恵をしぼりました。ある意味では当時の技術の粋を集めたといってもよいかもしれません。

ビイドロ細工の阿蘭陀船

ところで見世物としてたいへん人気の高かったもののひとつにガラス細工があります。残る記録からもそれがかなり大掛かりで手のこんだものだったことがわかりますが、江戸時代のビイドロ師の面目躍如たる仕掛けとは、いったいどんなものだったのでしょう。

長崎からひろまったガラス製造技術が大阪、京都をへて江戸にまでつたわったのは十八世紀のは

じめ頃といわれますが、ガラスを吹いて実際に小さな徳利や風鈴をつくる有様は、それ自体が珍しい見世物でもありました。やがてガラスを使った巧妙な細工物が大々的に興行されるようになります。その最初の記録は安永五年（一七七六）江戸中洲新地でのもので、具体的にどのような細工だったかは不明ですが、「龍宮のここに出現したるごとく」（『中洲雀』）と形容された見事さでした。その六年後には大阪難波新地でも似たような「びいどろさいく」がみられました。

下って文政期は細工物が大流行し、ガラス細工にも一段と派手な趣向が登場します。なかでも「阿蘭陀（おらんだ）船」をテーマにさまざまなからくりを組み合わせた出し物は人気がたかく、その後たびたび繰り返しておこなわれています。最初は文政二年（一八一九）東両国広

図1　弘化4年（1847）4月の浅草奥山での見世物を紹介した刷り物「キヤマン細工阿蘭陀船貢積込」（びいどろ史料庫蔵）

小路に出た長さ二丈（約六メートル）にのぼる、からくり仕掛けの人形が帆柱の上で曲芸をする阿蘭陀船で、長崎で七年の歳月をかけてつくられたというふれこみでした。このときは同時にギヤマン細工大燈籠という、おなじく五年がかりの高さ二丈二尺五寸（約六・七五メートル）、各面に異国の風景をあらわしたやはりたいへん手のこんだ作品が出て、ガラス細工の評判は一挙にたかまりました。

これもふくめて阿蘭陀船の出し物は、記録に残るだけでも弘化四年（一八四七）までに難波新地、名古屋大須、浅草奥山で合計七回おこなわれています。七福神、唐子、玄宗皇帝などのからくり人形を配しその巧妙な動きもみどころのひとつでしたが、それにしても長さ十一、二間、幅三間半などというガラス細工の船とはどのような造りだったのか、ちょっと想像がつきかねるほどです。

また文政三年に東両国でかかった「象頭山風景百分一模型」と題する見世物は、大阪のえびす橋から乗り合い船で讃岐の金毘羅宮に参詣するという趣向で、五色の精密なギヤマン細工でつくられた風景のなかで、機関装置の小舟や人形がアクロバット的な動きをみせるというものでした。背景の早変わりという芸の細かさもみせ、さらに、最後の万燈会の場面で無数の燈火が五色のギヤマンに反射するまばゆさは、まことに壮観であったといわれます。

「長崎くんち」のガラス細工

この模型は大阪の細工人玉井武楽斎によるもので、両国での見世物中いちばんの人気となって「細工は大阪に限る」とまでいわれました。阿蘭陀船も大阪の細工人の手になるものが多く、からくり

の技術もふくめて江戸のガラス細工は上方にいくらかおくれをとっていたようです。

江戸時代につくられたガラス細工としては、今でも「長崎くんち」に使われている今魚町の傘鉾がその姿をよくつたえています。これは幕末の作品で、直径二メートルちかい板の上に鯛、伊勢えび、魚籠、よし、青竹、打網などを配置して、まわりを蛇龍をかたどった竹細工でめぐらせてあります。これを見ると、すべてがガラスでできているわけではなく、ガラス管のなかに芯をとおすなどして、魚も本体は張り子でガラスは部分に効果的に使われていることがわかります。偏平なガラス管で巧妙に組み編げた魚籠など、本場長崎の職人芸をほうふつとさせるできばえです。

このようにガラス細工も大きくなるとどうしても土台や補強が必要になります。それを巧みにカバーし、さらにガラス管や棒をつなぎあわせたりしながら大きな作品をつくり上げる、というのがどうやら見世物の実態だったようです。ガラスの透明感やきらめきをいかしたいかにも涼しそうで異国情緒いっぱいの阿蘭陀船は、人々を魅了するまさに最適なテーマだったのです。上方で評判をとった大掛かりな籠細工などの出し物には早速江戸の興行師がつき、何叟かの回船に積み込んで海路江戸に運んだといいますから、同じようにガラス細工も組み立て式につくられて巡業したのでしょう。なにぶん壊れやすいガラスのことです。ようやく無事に展示にこぎつけても、天保七年六月の暴風雨で小屋もろとも吹き飛ばされてこっぱ微塵になった両国のギヤマン大燈籠のように、興行主が泣いても泣ききれない例がほかにもあったにちがいありません。

オランダ渡りの七面鏡

軒をならべる大きな見世物小屋のほかにも、オランダ渡りの虫眼鏡や万年時計、七面鏡、そしてエレキテルなど、ひょいと覗いてみたくなるような小屋もたくさんありました。たとえば文政四年（一八二一）に名古屋で興行された七面鏡は、凹面鏡や凸面鏡など実物が変形してうつる七種の鏡をならべただけの他愛のないものでしたが、人々を喜ばせるには充分で、

馬鹿なこともう此上はなな鏡己が姿を銭出して見る

などという狂歌もつくられたほどでした。

こうして江戸の庶民は巨大なスケールの細工物をみては驚き、小さな虫を舶来の顕微鏡で覗いて

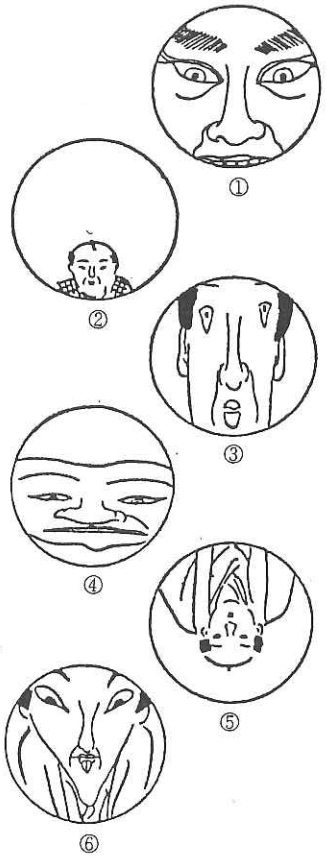


図2　文政4年（1821）11月，名古屋清寿院門内での見世物「七面鏡」の図．顔がさまざまに映る鏡を並べ，それぞれ①大人国，②小人国，③長命国，④平面国，⑤逆見国，⑥南京国などの札をつけた趣向．（小寺玉晁『見世物雑志』巻1（文政11年）より）

は初めてみる新しい世界に感動したのでした。オランダわたりの珍しい道具に蘭学への興味をそそられた少年たちも多かったことでしょう。

幕末、世情が騒然となるにつれ大掛かりな見世物は次第に姿を消していきました。さん然と輝くビイドロの船のかわりに黒船が話題をさらい、ガラスは実用的な製品をつくることが第一になっていきます。ビイドロ細工師が一世一代をかけ、興行師がその身代をかけた夢多き時代は終わったのでした。